

刀匠 がっ さん きだ とし 月山貞利さん

技を伝え、技を磨く。800年間、連綿と受け継がれてきた伝統技法でつくる日本刀

奈良県桜井市。原始信仰の対象だったとされる三輪山の麓に、800年の伝統をもつ刀工・月山一門の鍛冶場がある。直系の刀工がこれほど長く続いている例は、月山一門の他にはないといわれる。しかも基本的な技術は、800年前と少しも変わらない。現代のハイテクに匹敵するような精緻な技術が、秘伝として連綿と受け継がれてきたのである。

「奥の細道」にも出てくる名門

ゴン、ゴン、キーン。
リズムカルに鎚を振り下ろす金属音が響き渡る。そのたびに真っ赤な火花が四方八方に飛び散る。

何度も何度も鎚を振り下ろし、鋼を打つ。そうして不純物が飛ばされ、炭素量が平均化されて鋼が鍛えられていく。刀匠も弟子も、ほとんど声を発しない。しかし、鎚を振り下ろす役割の先手を務める弟子は、師匠の呼吸を読んで、鎚を打つ力を微妙に変えている。

ゴン、ゴン、カキーン。
師匠と弟子の、息の合った鍛錬の作業が続く。

刀鍛冶集団の月山一門は、その起源を鎌倉時代にまで遡る。その名が物語るように、もともとは山形県の月山を活動の拠点とし、松尾芭蕉の「奥の細道」の一節にも登場するほど知られた存在だった。だが、一門の祖、月山貞吉は、月山の名をより広く世間に知らしめたいとして活動拠点を幕末の大坂^{なりのや}錦屋町に移した。その後、京都の亀岡、奈良の吉野などを経て、1995年、桜井に「月山

日本刀鍛錬道場」を構えた。「刀をつくる技術は、800年前と基本的に同じ。道具類もほとんど変わっていません」

貞吉から数えて5代目の当主となる月山貞利さんが言う。

砂鉄からつくられる良質な玉鋼^{たまはがね}を1,200~1,300度の高温で熱し、叩きながら何度も折り返して鍛錬し、加熱した地鉄^{じがね}を水の中に入れて一気に冷やす焼き入れなど、いくつかの工程を経て日本刀はつくられる。

一つひとつの作業は決して複雑なものではない。だが、鍛錬の工程では、砂鉄の含有量の異なる鋼を混ぜ合わせたりしながら何度も折り返して、複雑な層状組織をつくっていく。

鍛錬を終えた地鉄を顕微鏡で見ると、驚くべきことに3万以上の層が重なった微細な結晶構造になっているという。「折れず、曲がらず、よく切れる」という名刀を生み出す秘密が、そこにある。

「焼き入れのときには、地鉄の温度を見るため真っ暗にします。日の光や照明があると、温度がよく分からないのです。温度計などは使いません。一振りずつ、地鉄が少しずつ違

い、熱に対する反応も違いますから、温度計で測ってもうまくいきません」

秘伝でつくる綾杉肌^{あやすぎはだ}の紋様

鍛錬のときも焼き入れのときも、炭を使う。それも必ず火力の強い松の炭である。ただし、鍛錬のときと焼き入れのときとでは、炭の大きさが微妙に違う。焼き入れのときは、鍛錬のときより温度を少し下げる必要があるからだ。もちろん、いちいち炭の大きさを測ったりもしないし、ガスバーナーなども使わない。古来から伝わる製法そのままだ。

月山貞利さんは1982年の新作名刀展で、刀匠としての最高位「無鑑査」の称号を取得している。2003年には奈良県指定無形文化財の保持者にも認定されている。文字通り当代きっての名匠である。それでも鍛錬の工程で刀身に割れが出たり傷がついたりすることがある。4~5本鍛錬して、最終工程の焼き入れまでいけるのは1本程度だ。

「焼き入れの結果によって、名刀になるかどうかが決まります。全工程、最初から最後まで気を抜かせませんが、



月山貞利さん(本名:月山 清) 1946年生まれ。大阪工業大学建築学科卒業。父親である月山貞一師匠のもとで修業。1982年には新作名刀展で刀匠として最高位の「無鑑査」の称号を得る。奈良県指定無形文化財保持者。全日本刀匠会顧問。第62回伊勢神宮式年遷宮御料太刀謹作。3年に1回ほどのペースで、東京日本橋高島屋で「刀匠月山貞利展」を開いている。

焼き入れは特に難しい。焼き入れの前日には今でも気が高ぶります。しかし、焼き入れで割れが生じることもあります。そうなると、そこまでの努力がすべて水泡に帰してしまいます」

だから名匠といえども、納得できる作品は短刀なども含めて年にせいぜい10振り程度しかできないという。

そうした工程は、月山派に限らず、他の流派でもほぼ同じである。ただ、月山派にはひとつ、大きな特徴がある。「綾杉肌」だ。鍛錬の結果、刀身には玉鋼の層が作り出す紋様が現れる。地鉄肌と呼ぶこの紋様は流派によって異なり、「板目」「杓目」などがあるが、月山派の場合は、刃に向かって規則的に連なる波状の「綾杉肌」という紋様を造形しているのである。そのため綾杉肌のことは、月山肌とも言われる。800年受け継

がれてきたまさに秘伝の技法である。

また月山派は、刀匠が自ら刀身に彫刻を刻むことでも知られている。

「溶かした松やにを台に置き、その上に刀身を乗せて固定し、鑿で彫っていきます。昔は梵字など武士が信仰するものを彫りましたが、時代が下ると『武運長久』などの文字が多くなりました。美術刀剣の時代になった戦後は、装飾性が重視され、文字とは限らず龍などを彫ることも多くなりました。松やにを使うのは、しっかり固定できるのに、きれいにはがせ、刀には全く影響を与えないからです」

日本文化の神髄である 技を守り抜く

こうした伝統技法を代々伝えてきた月山派にも、その長い歴史におい

て大きな困難に直面したことが何度かあった。

たとえば1876（明治9）年、明治政府によって廃刀令が発せられたときがそうだった。一般人の帯刀が禁じられたことにより、日本刀に対する需要は大幅に減少したのである。と同時に、日本刀が実用品だった時代が幕を降ろしたのであった。

だが、多くの刀工にとってそれ以上に厳しかったのは、1946年、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）によって刀剣類が没収されたときだった。銃砲類の所持が禁止されたため、何十万本という日本刀が没収されたのである。このときは刀剣の製造も事実上、禁止された。廃刀令のときは、刀工が刀をつくることはできたが、このときはつくることさえ許されなかったのだ。そのため廃業、転業する刀工が相次いだのである。

このとき、月山派の当主は、後に重要無形文化財（人間国宝）に認定された2代月山貞一氏であった。月山貞利さんの父親である貞一氏は、この苦境にじっと耐え、月山の伝統を守り続けた。その姿を身近に見ていたがゆえに、貞利さんは貞一氏の後を継いでから「何としても月山の伝統を守り、次の世代に伝えていく」と常に思うようになったのであった。そして今、貞利さんの後継者である長男の貞伸さんもまた「日本文化の神髄である日本刀の技を守り抜く」という強い思いを抱いている。

貞伸さんは大学在学中から父である貞利さんを師匠とし、鍛刀を修業してきた。刀工になるためには、刀匠資格を持つ刀工の下で5年以上の修業を積み、文化庁が主催する研修会を修了することが条件となっている。貞伸さんは2006年、刀工となる認可を受け、翌2007年、初めて作品を出品した「新作名刀展」で新人賞を受賞している。さすがは名門のサラブレッドというところだが、実は貞伸さんが「自分も刀工になりたい」といったとき、貞利さんは「刀

玉鋼から何度も何度も鍛錬を経て、名刀へと姿を変えていく。





師匠と並ぶ息子の貞伸さん。「師匠は厳しいですね」。

鍛冶は苦勞が多いからやめておけ」と諫めたのである。

月山道場には、今も年に何人か、弟子入りを志願してくる若者がいる。その際にも貞利さんは「日本刀をつくる立場より、日本刀を買える立場になることを目指しなさい」ということが多い。

横綱白鵬に贈る名刀

刀工の修業は厳しい。月山派の場合、道場に住み込みで修業する5年間は無給で、小遣い程度の金を渡されるだけ。休日にも外部の勉強会や展示会などに行くことが多く、ほとんど年中無休の日々が続く。最初の1年は刀に触れることも許されず、週に何回かは松炭を適当な大きさになたで割る炭割の作業に従事する。全身が真っ黒になる辛い仕事だ。師匠に従って何キロもある鎚を何度も振り下ろす鍛錬の作業を終えると、慣れないうちは全身の筋肉が痛みに悲鳴を上げる。

しかもそうした厳しい修行を終え、晴れて独立できたとしても、今度は別の厳しさが待っている。

現在、刀匠として活動している人は全国には300人前後いるが、作刀を専業にしている刀匠となると、ずっと少ない。美術品としての日本刀

に対する需要は、決して多くないのが実情だ。

貞利さんは、そうした厳しさを身を持って知っているからこそ、貞伸さんが弟子入りを志願したときに「やめておけ」といったのだった。それでも貞伸さんの意志が強かったので、弟子入りを認めたのである。むしろ貞伸さんが自ら後継者に名乗り出たことが、貞利さんとてうれしくなかったはずはない。

「最近、息子の方が人気があるんです」

そう言って笑う貞利さんの顔は、

刀匠としての厳しさではなく、父親としての慈愛に満ちていた。

現在、貞利さんの門下にはその貞伸さんを入れて3人の弟子がいる。4月にひとり、卒業するまでは4人だった。

「高校生のときに日本刀を見て、自分もつくりたいと思ったんです」

弟子のひとりが入門の動機をそう語る。

一切の無駄を省いた造形の美しさ。研ぎ澄まされた地鉄の肌や文様の美しさ。そして鋭い刃先が怖いほどの迫力を感じさせる美しさ。そうした日本刀の美しさは、海外でも高く評価されている。1982年、米国のボストン美術館で開かれた「人間国宝展」に月山貞一氏が招かれたときに同行した貞利さんは、反響の大きさに驚き、感激したという。

昨年12月、月山道場を大相撲の第69代横綱白鵬関が訪れた。後援会が白鵬関に太刀を贈ることになり、その作刀を月山貞利さんに依頼したので、初打ちに横綱を招いたのである。貞利さんは以前、横綱貴乃花と若乃花の太刀を鍛刀したこともある。

白鵬関に贈られる太刀は、間もなく完成する。土俵入りでは、この太刀が使われることになる予定だ。



初打ちでオレンジ色に燃えた玉鋼を打つ横綱白鵬関。